様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ３１ 日現在

機関番号：２２３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2016
課題番号：２３５９３１５２

研究課題名（和文）小児看護に携わるジェネラリストナースを支援する教育プログラム立案モデルの開発

研究課題名（英文）Development of an educational program planning model to support generalist nurses involved in child health nursing

研究代表者
横山　京子（Yokoyama, Kyoko）

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授

研究者番号：８０３４１９７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、小児看護に携わるジェネラリストナースのスタッフ・ディベロップメントを支援するための看護継続教育プログラム立案モデルを開発することである。この目的達成に向け研究を実施し、次の成果を得た。小児看護に携わるジェネラリストナースの教育ニードおよび学習ニードを質的・帰納的に解明した。
今後の課題は、これらの成果を基盤としたアセスメントツールを完成させ、小児看護に携わるジェネラリストナースの教育ニード・学習ニードを測定することである。また、その結果を反映した看護継続教育プログラム立案モデルを作成することである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a continuing nursing education program planning model to support the staff development of generalist nurses involved in child health nursing. We conducted research to achieve this objective and obtained the following results. We clarified the educational needs and learning needs of the generalist nurses involved in child health nursing by qualitative and inductive method.
The future task is to measure the educational needs and learning needs of the generalist nurses involved in child health nursing by completing the assessment tool. Moreover, another task is to prepare a continuing nursing education program planning model reflecting the measurement results.

研究分野：看護学

キーワード：看護継続教育　学習ニードアセスメントツール　教育ニードアセスメントツール　キャリア開発　小児看護領域　教育プログラム

１．研究開始当初の背景

ジェネラリストナースとは、幅広い知識と技術を身につけ、従事した領域において看護師独自の機能を発揮し、直接クライエントに質の高い看護を提供することを志向する看護職者をさす。本研究は、看護基礎教育課程修了直後、あるいは、さまざまな領域の実践経験を経て、小児病棟などに配属され、小児看護に携わるジェネラリストナース（以下、小児看護ジェネラリストナースとする）を対象とする看護継続教育に焦点を当てる。

わが国の小児医療を取り巻く状況は、医学や医療機器のめざましい進歩を背景として、かつてない速度で高度化・複雑化している。加えて、疾病構造、医療体制、経済状況の変化は、入院期間の短縮化をもたらした。そのため、小児医療に携わる看護師に求められる知識・技術は、質・量ともに高まっている。

これらの状況に対応するための人材として、小児看護を専門とするスペシャリスト、専門看護師・認定看護師の育成が進められている。2010年7月現在、小児看護専門看護師は40名であり、47都道府県のうち、16県にのみ存在する。また、小児救急認定看護師は111名、新生児集中ケア認定看護師は193名存在するが、いずれの認定看護師も存在しない県もある（日本看護協会，2010）。このことは、わが国の小児看護に携わる看護師の大部分がジェネラリストとして活動していることを意味し、わが国の小児医療の質の保証は、小児看護ジェネラリストナースが提供する看護の質に左右されると言っても過言ではない。しかし、小児看護に携わる看護師が医師と協働する上で直面する問題を調査した研究（山口・横山・舟島，2005）は、４割以上の看護師が、「知識・技術の不足」を感じていることを明らかにした。この結果は、小児看護に携わる看護師が、複雑かつ高度に進化する小児医療に対応するための知識・技術の必要性とその不足を感じながらも、それを打開する方策を見いだせない状況が存在することを示唆する。

以上は、小児看護ジェネラリストナースのキャリアアップに向け、「小児医療の提供に伴い看護師に求められる専門的な知識・技術の修得」を助ける看護継続教育が必須であることを示す。

わが国の看護継続教育は、主として「看護継続教育機関」である都道府県看護協会や「看護職者が所属する組織」である各医療施設により提供されている。しかし、47都道府県看護協会のうち、24県看護協会のみが小児看護に関する継続教育プログラムを提供しており、その内容は、新生児集中ケア、小児救急看護、子どもの虐待予防と発見など特定の発達段階・健康状態に偏っていた。一方、看護職者の所属する組織が提供する院内教育プログラムは、試行錯誤しながら立案、提供されており、各看護単位の教育の充実が一課題となっていた（三浦，2002）。小児看護に携わる看護師への院内教育に関する文献検討の結果は、小児専門病院の教育担当者が、自らの経験に基づき、試行錯誤しながら院内教育を企画、運営している報告（眞下，2010）はあるが、小児科に加え他の診療科の病床を併せ持つ病院の教育担当者からの報告は極めて少ない。これらのことは、小児看護に携わる看護師の多くが、求められる専門的な知識・技術を病棟の学習会や看護職者個々人の自己学習により獲得している可能性が高いことを示唆する。

以上は、小児看護ジェネラリストナースを対象とした組織的・系統的な看護継続教育プログラムの提供が、小児医療の質保証に向けて、最優先されるべき課題であることを示す。

研究者らは、組織的・系統的な看護継続教育プログラムの立案に向けて、日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム（舟島，三浦：2007）を既に開発している。このシステムは、看護職者に高品質な看護継続教育を提供し職業的発達を支援することを通して看護実践・教育の質向上をその目的と

している。システムの中核は、２種類のアセスメントツールであり、これらのツールを用いて、看護職者の教育ニード、学習ニードを測定し、その診断結果に基づき看護職者が所属する施設あるいは看護継続教育機関の実情に即した教育プログラムを立案することができる。また、その有効性・確実性は、先行研究（山下・舟島，2008）を通して既に検証されている。しかし、小児看護に携わる看護師は、先に述べたような高度かつ専門化した知識・技術を求められるため、この領域に携わる看護師特有の教育ニード、学習ニードを明らかにし、それらに基づく教育プログラムを立案する必要がある。国内外の文献を検討した結果、小児看護領域の看護師の専門性を反映した教育ニード、学習ニードをアセスメントする測定用具や、これらを用いた教育プログラムの立案モデルは開発されていなかった。そこで、本研究は、小児看護に携わるジェネラリストナースに焦点を当て、そのキャリアアップを目指した継続教育プログラムの立案モデルを開発する。

２．研究の目的

(1)小児看護ジェネラリストナースの教育ニード、学習ニードを解明する。

(2)(1)の成果を基盤とした「教育ニードアセスメントツール」「学習ニードアセスメントツール」を開発する。

(3)開発したアセスメントツールを用いて小児看護ジェネラリストナースの教育ニード、学習ニードを測定する。

(4)(3)の結果を反映した教育プログラム例の提示と立案方法を記述し、看護継続教育プログラム立案モデルとして統合する。

【引用文献】

①日本看護協会(2010)：都道府県別登録者数［ http://www.nurse.or.jp/nursing/qualification/index.html ］

②山口桂子・横山京子・舟島なをみ他(2005)：小児医療における医師と看護師の協働に関する問題－協働を妨げる看護師側の要因－，愛知県立看護大学紀要,1-9.

③三浦弘恵(2002)：看護管理者が知覚する院内教育の課題，看護研究，35(6)，27-34.

④眞下茂美他(2010)：多重課題シミュレーションを導入した新人看護師教育,小児看護，33(3)，354-359.

⑤舟島なをみ編集(2007)：院内教育プログラムの立案・実施・評価「日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム」の活用，医学書院.

⑥山下暢子・舟島なをみ(2008)：日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システムの有効性検証－システム導入により解決できたＤ県看護協会の問題－，第 39 回日本看護学会抄録集，20.

３．研究の方法

研究目的達成に向け、以下の 2 段階を経て研究を実施した。

(1)第１段階：小児看護ジェネラリストナースの教育ニードおよび学習ニードの解明

①研究対象者：無作為抽出した小児関連診療科目を有する病院と小児専門病院のうち、看護管理者から研究協力を得た 62 施設 723 名の小児看護師であり、研究の参加に同意の得られた者を研究対象とした。

②測定用具

測定用具に小児看護師の望ましい行動および学習ニードを問う質問と対象者の特性に関する質問を含む調査紙を用いた。小児看護に携わる看護師の望ましい行動に関する質問は、望ましい行動を示す対象が「いる」と回答した者にその具体的な行動を問う自由回答式質問により構成した。また。学習ニードに関する質問は、学習ニードの有無を問う質問と、学習ニードが「ある」と回答した者にその具体的な内容を問う自由回答式質問により構成した。質問紙の内容的妥当性は数名の小児看護に携わる看護師への聞き取り調査を通して確認した。

③データ収集方法：無作為抽出した全国の小児関連診療科目を有する病院と小児専門病院の看護管理責任者に研究協力を依頼し、承諾の得られた 62 施設 723 名に研究協力を依頼し、責任者を通して研究協力依頼状、質問紙、返信用封筒を配布した。回収は、対象者が個別に投函する方法を用いた。調査期間は、2012 年 5 月 15 日から 7 月 1 日であった。

④分析方法：Berelson，B．の方法論を参考にした看護教育学における内容分析（舟島，2007）を用いて分析し、小児看護に携わる看護師の「望ましい行動」および「学習ニード」を解明した。

(2)第２段階：信頼性・妥当性を確保した小児看護ジェネラリストナースの「教育ニードアセスメントツール」および「学習ニードアセスメントツール」の開発

①質問項目の作成、尺度化とレイアウト：第１段階で解明した小児看護に携わる看護師の「学習ニード」および「望ましい行動」を基盤に質問項目を作成し、尺度化した。

学習ニードアセスメントツールは、30 質問項目を作成し、各質問項目を 6 段階リカート法により尺度化した。選択肢を「全く必要なし（1 点）」、「必要なし（2 点）」、「あまり必要なし（３点）」、「少し必要（４点）」「必要（5 点）」、「とても必要（6 点）」と設定した。

教育ニードアセスメントツールは、質問項目を作成中である。各質問項目を４段階リカート法により尺度化している。選択肢を「非常に当てはまる（1 点）」、「かなり当てはまる（2 点）」、「やや当てはまる（３点）」、「殆ど当てはまらない（４点）」と設定している。

②アセスメントツールの内容的妥当性の検討：小児看護に携わる看護師を対象に専門家会議を開催し、会議を経て修正した学習ニードアセスメントツールを用いて便宜的に抽出した 2 病院に就業する看護師 30 名を対象にパイロットスタディを実施した。この結果により、選択肢が適切に設定され、かつ識別力を持つことを確認した。

③全国調査

一次調査：「学習ニードアセスメントツール」の信頼性・妥当性の検証を目的に調査を実施した。測定用具には、作成したアセスメントツールと特性調査紙を用いた。全国の病院名簿より無作為に抽出した 132 施設の看護管理責任者に往復はがきを用いて研究協力を依頼した。承諾の得られた 47 施設の小児看護に携わる看護師に看護管理責任者を通して、研究協力依頼状、質問紙、返信用封筒を配布した。回収は、対象者が個別に投函する方法を用いた。調査期間は、2017 年 1 月 20 日から 2 月 28 日であった。

二次調査：再テスト法による安定性の検討を目的に２度の調査を実施した。一次調査と同様の測定用具を用いた。便宜的標本である２病院の小児看護に携わる看護師を対象に研究協力を依頼し、質問紙、返信用封筒を配布した。回収には、一次調査と同様の方法を用いた。調査期間は、第 1 回が 2017 年 2 月 3 日から 2 月 28 日であった。

④分析方法

学習ニードアセスメントツールの信頼性・妥当性の検証に向け、内的整合性および安定性による信頼性、内容的妥当性、構成概念妥当性を検討する。

【引用文献】

舟島なをみ(2007)：質的研究への挑戦，第 2 版，51-78，医学書院．

４．研究成果

本研究の成果は、以下の 2 点である。

(1) 小児看護ジェネラリストナースの学習ニードの解明

学習ニードがあると回答し、その内容が明瞭に記述された 278 名の 782 記録単位を分析対象とした。これらを質的帰納的に分析した結果、小児看護に携わる看護師の学習ニード 40 種類を解明した。Scott の式に基づくカテゴリ分類への一致率は、91.2%、93.4%であり、カテゴリが信頼性を確保していることを確

認した。明らかになったカテゴリは、【疾患・病期・症状・治療・障害に応じた小児への看護に必要な知識・技術・態度】、【疾病や障害をもつ小児の家族への看護に関する知識・技術・態度】、【小児への発達を考慮した看護に関する知識・技術・態度】、【小児の医療事故防止と安全確保の工夫】、【プレパレーション】、【最新の治療と小児看護の知識】、【被虐待児への看護に必要な知識・技術・態度】、【災害時の小児医療】などであった。これらの結果は、小児と家族を対象とする看護実践、小児の健康状況や対象特性に合わせた看護実践、小児を取り巻く社会の変化に応じた看護実践など、学習ニードの多くが小児看護師特有の活動に特徴づけられていることを示唆した。

(2)小児看護ジェネラリストナースの望ましい行動の解明

望ましい行動を示す小児看護に携わる看護師がいると回答し、その内容が明瞭に記述された179名の360記録単位を分析対象とした。質的帰納的に分析した結果、小児看護に携わる看護師の望ましい行動 34 種類が形成された。Scott の式に基づくカテゴリ分類への一致率は、83.9%、91.2%であり、カテゴリが信頼性を確保していることを確認した。明らかになったカテゴリは、【子どものニードの把握に向け必須事項を逃すことなく観察するために遊びの機会も活用する】、【多忙さに影響を受けることなく啼泣している子どもの援助を優先する】、【プレパレーションを確実に行い、身体侵襲の有無に関わらず子どもに必要な処置を短時間で的確に行う】などであった。これらの結果は、多様な機会をとらえて収集した情報に基づき子どもの発達やニードに合わせて援助を行う、優先度を考慮し的確に子どもの援助を行うなど、望ましい行動の多くが小児看護師特有の活動に特徴づけられていることを示唆した。

今後の課題は次の通りである。

調査が終了した「学習ニードアセスメントツール」のデータ分析に基づき信頼性・妥当性を検証する。また、作成中の「教育ニードアセスメントツール」の全国調査を実施し、その信頼性・妥当性検証を行う。またこれらの調査結果に基づき、小児看護ジェネラリストナースの教育ニード、学習ニードを診断する。加えて、その診断結果を反映した教育プログラム例の提示と立案方法を記述し、看護継続教育プログラム立案モデルとして統合する。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計１件）

横山　京子、舟島　なをみ、中山　登志子、山下　暢子、小児看護に携わる看護師の学習ニードに関する研究、日本看護科学学会第36回学術集会、2015年12月5日、JMSアステールプラザ（広島県・広島市）

６．研究組織

(1)研究代表者

横山　京子（YOKOYAMA, Kyoko）
群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授
研究者番号：８０３４１９７３

(2)研究分担者

中山　登志子（NAKAYAMA, Toshiko）
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：６０４１５５６０

(3)研究分担者

野本　百合子（NOMOTO, Yuriko）
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・教授
研究者番号：６０２０８４０２

(4)研究分担者

定廣　和香子（SADAHIRO, Wakako）
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：６０２９９８９９

(5)研究分担者

山下　暢子（YAMASHITA, Nobuko）
群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授
研究者番号：３０２７９６３２

(6)連携研究者

舟島　なをみ（FUNASHIMA, Naomi）
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：００２２９０９８